Japanese Red Cross Society NEWS

赤十字 NEWS

http://www.jrc.or.jp

April 2018
NO.935
4

平成30年4月1日（毎月1日発行）
赤十字新聞　第935号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

幸せな最期のときを考える。

これからますます高齢者が増えていく日本。
2018年度から診療報酬・介護報酬もダブルで改定され、
人生の終末期を迎える場所は「病院・施設から在宅へ」の流れがさらに加速します。
“みとり”という大きなテーマに対して、
日本赤十字社も家族とともに真摯（しんし）に向き合います。

CONTENTS

FEATURE__2・3
「幸せだった」の一言のために できること

TOPICS__4・5
平成30年度 日本赤十字社の予算概要
広がる防災・減災の輪

AREA NEWS__6・7
大阪府／香川県／神奈川県／東京都／熊本県／関東甲信越／大分県／宮城県／全国

Column
［健康豆知識］
スマホ老眼

WORLD NEWS__8
地震から３年。被災地のニーズを捉え支援を届ける（ネパール）
１枚の写真から（ネパール）

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
TEL：03-3438-1311
一部 20 円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

平成30年4月1日（毎月1日発行） 第935号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）
第935号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可） 平成30年4月1日（毎月1日発行）

「幸せだった」の一言のためにできること

誰にでも訪れる「最期のとき」に向き合うことが、今生きている時間をより豊かにする――。あなたの大切な人が「あぁ、幸せな人生だった」と言えるように、できることは何か、一緒に考えてみませんか？

「ありがとう」の想（おも）いを形にする。

「錦江園」のキーワードは「暮らしの継続」です。皆さんの生活ペースを尊重し、入居者80人それぞれに日課表を作成して「住み慣れた自宅での穏やかな生活」を目指しています。家族の面会や寝泊まりも、365日24時間ＯＫとし、家族と入居者がいつでもコミュニケーションを図れる環境づくりに励んでいます。

主人公はあくまでも高齢者本人。家族や職員の価値観で物事を決めつけないようにすることが大事です。「病気を治すこと」を目標にしてしまうと、本人、家族共に、つらく苦しい時間が長くなることもあります。大切な人の死を意識するのはつらいことですが、後悔のない幸せな最期を見送るためには必要なことです。人生の最期を豊かに過ごせるよう、できる限りのサポートに努めています。

日本赤十字社鹿児島県支部
特別養護老人ホーム「錦江園」
生活相談員
中村一也（左）
主事
日高智絵（右）

幸せなひととき。願いを叶えた家族の事例です。

さん迷惑かけたな。ありがとう。お前も幸せだったか」と、ほとんど意識のない妻の胸に手を当て、語り掛ける夫。その１週間後、お二人とも息を引き取られました。娘さんも二人が再会を果たすことができ、心が満たされたそうです。

自宅での宿泊の願いを叶えて亡くなった方の息子さんは、そのお通夜で「（父親は）自分らしい人生をやり切ったし、自分も見守った。今日はお祝い。にぎやかに最期を送り出せる」と話されました。願いを叶え、亡くなるときに「私の人生は幸せだった」と振り返られる方は多くいらっしゃいます。

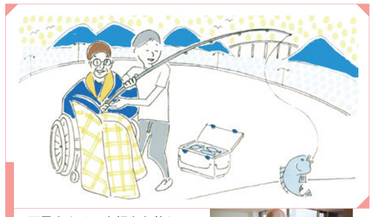
終末期に向き合うことは、本人はもとより、家族からも「幸せ」「やってよかった」という声が上がっています。“みとり”は怖いものではありません。大きな癒やしにもつながっているのかもしれません。

大田ミツ子さん(96)は、暖かくなったら娘や孫と一緒に、先に亡くなったご主人と息子さんの眠るお墓参りへ出かけるのが望みです。体も言葉も不自由になったミツ子さんですが、孫の写真を見せると、うれしそうに名前を呼びます。

娘さんお孫さんと、数年前にもお花見とお墓参りへ。車椅子が入れない場所は、家族や介護スタッフだけでなく、ご近所の方も集まって移動などをサポート

畑仕事が大好きだったという藤崎ノブ子さん(91)。枇杷(びわ)の　木の下でケガをしているところを助けた愛猫のみぃちゃんと、かつて暮らしていた家で念願の再会を果たすことができました。「また会えて本当にうれしい」と涙がホロリ…。

みぃちゃんを引き取っている弟さんが、ノブ子さんの家まで連れてきてくれての再会。慣れ親しんだ自宅で会えたことで幸せが増したそうです



西勇さんは、大好きな釣りへ行く夢を叶えました。食事が困難で胃ろう※をしていましたが、自分で釣った魚を食べることを目標にしたリハビリメニューを作成し実施。つみれ汁を一口堪能し、「サンキュー」と笑顔で何度も繰り返し、最高の思い出に。

※胃ろう：体外から直接胃に栄養剤などを注入する治療法

「昔、船を持っていたんだ」という思い出話から勇さんの願いを聞きだしました。かしこまって話すより、普段のたわいもない会話がきっかけに

最期の願い、叶えてあげませんか？

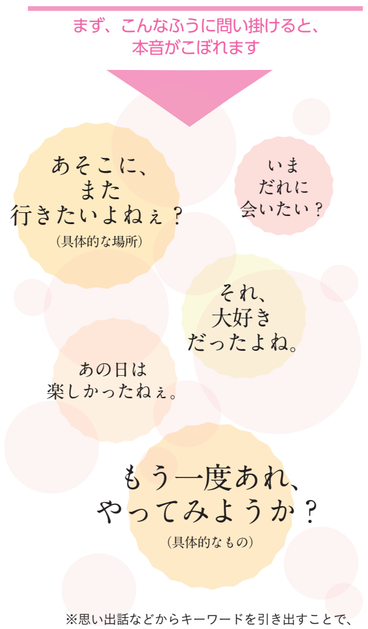
幸せな終末期のために最期をどこで過ごすか、どう旅立ちを見送るか……。悔いを残さず、幸せな気持ちで「そのとき」に向き合えるように、周りの人間はどんなことができるのでしょうか。

鹿児島県支部特別養護老人ホーム「錦江園」が見いだした答えの一つは「最期の願いを叶（かな）えること」。家族が死に向き合う勇気を持ち、本人の望みを実現する過程で「良い人生だった」と心が満たされ、幸せな旅の準備につながることが分かりました。

人生の最期を支えるためには、あらかじめ家族は本人の意思を知っておくことが重要です。延命治療といった大きな問題から日常生活、思い出作りとさまざまですが、まずできることは「問い掛け」。本音を引き出すのはなかなか難しいかもしれませんが、優しく耳を傾けてみてください。希望が出たら「それは無理」と決めつけず、地域や介護スタッフと一緒に、叶える方法を探してみませんか。

＊＊＊

「父と母を会わせてあげられませんか」。入居者の娘さんからそんな依頼を受けたことがありました。毎日妻(母)の面会に通っていた夫(父)が、突然姿を現さなくなったのです。理由は末期がん。妻も夫も最期の瞬間が近づき、互いの死期が分かっているのに、お別れを言い合うことができない…。家族の願いに応えるため、スタッフは夫の入院先の病院に協力を請い、愛する夫婦の最期の再会を実現しました。「おい、また会えたな。あの世で言おうと思っていたことがあるんだ。たく



※思い出話などからキーワードを引き出すことで、探っていきます

「何もしてあげられなかった」と後悔しないためにできることがあります

平成30年4月1日（毎月1日発行） 第935号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

平成30年度 日本赤十字社の予算概要

日本赤十字社では、一般会計のほか、医療、血液、社会福祉の３つの事業にかかる特別会計を設けています。以下に平成 30 年度事業計画に基づく各会計の予算概要を報告します。各予算内容の詳細については、日本赤十字社のウェブサイト（http://www.jrc.or.jp）もしくは本社・支部でご覧いただけます。
※各合計額には、本社・支部・施設間の内部取引額を含んでいます

日赤の事業と財源

「苦しんでいる人を救いたい」という理念の下、日本赤十字社は災害救護活動や国際救援活動をはじめとして、さまざまな事業を展開しています。これらの事業の財源は、それぞれの事業によって異なり、会費や寄付金を財源とする「一般会計」と各事業での収益を財源とする「特別会計」があります。

一般会計

本社および47都道府県支部において、個人・法人の皆さまからの会費および寄付金などを主な財源に、国際活動、災害救護、救急法など講習会、青少年赤十字やボランティアの活動など、本社・支部の事業にかかる歳入歳出予算をまとめたものです。 **※東日本大震災義援金にかかる歳入歳出予算は、含まれておりません**

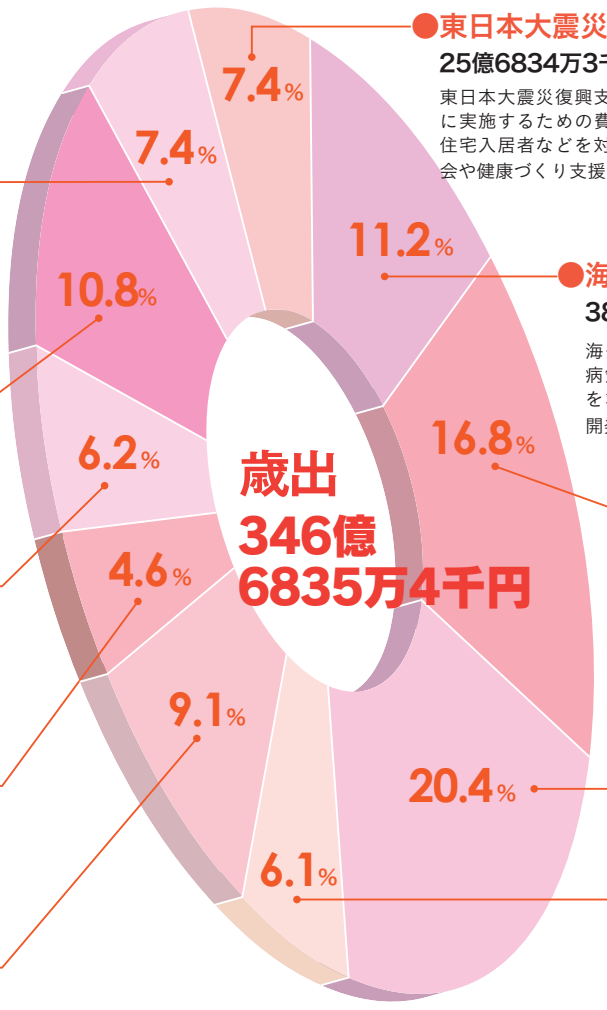
●国内の災害救護活動のために
25億6706万3千円
救護班の派遣、救援物資の備蓄、救護実施体制を強化するためなどの費用（防災教育事業の全国展開など）

●「守る」を広める活動のために
37億3853万円
救急法などの講習会、奉仕団・青少年赤十字活動普及の費用（健康生活支援講習の促進、青少年赤十字防災教育プログラムの推進、ボランティア研修の強化・見直しなど）

●地域のボランティア活動支援のために
21億4839万1千円
地区・分区への事業費・事務費の交付金

●翌年度以降の継続事業のために
15億8411万円
災害救護活動、国際救護活動などの翌年度以降の実施に備えた積立金

●会員募集・広報のために
31億5276万4千円
赤十字会員への参加呼び掛けや広報活動の費用



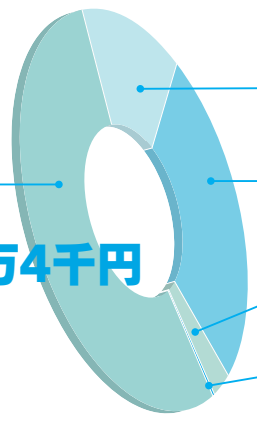
●東日本大震災復興支援のために
25億6834万3千円
東日本大震災復興支援事業を着実に実施するための費用など（仮設住宅入居者などを対象にした交流会や健康づくり支援など）

●海外での救援・開発協力活動のために
38億8223万5千円
海外で紛争や自然災害、病気などに苦しむ人びとを救うための国際救援、開発協力の費用

●事務管理のために
58億3829万5千円
支部、病院、社会福祉施設の事務局・本部機能としての事務経費など（その他）

●赤十字施設の設備投資のために
70億8695万9千円
支部、病院、血液センター、社会福祉施設の基盤整備の費用、災害救護設備や救急医療体制の整備などの費用、建物の整備、資産の維持管理などの費用

●本社送納金
21億166万4千円
支部から本社への送納金



●会費（社費）・寄付金・海外への救援金の寄付
188億8660万1千円

●前年度繰越金など
47億9921万2千円

●繰入金収入など（東日本大震災海外救援金含む）
98億2890万5千円

●国庫補助金や公益補助金
9億9258万5千円

●国庫委託金など
1億6105万1千円

●詳細は日本赤十字社ウェブサイトをご確認ください
http://www.jrc.or.jp/about/financialresult/

特別会計

医療施設
赤十字医療施設の運営などにかかる予算をまとめたもので、診療収益を主な財源として、病院運営のための費用などに充てられます。

■収入	1 兆 676 億 8960 万 1 千円
■支出	1 兆 924 億 1697 万 2 千円
■差引額	-247 億 2737 万 1 千円

血液事業
血液事業の推進にかかる予算をまとめたもので、輸血用血液製剤供給収益を主な財源として、安全な血液製剤供給のための費用などに充てられます。

■収入	1615 億 9866 万 1 千円
■支出	1577 億 9772 万 8 千円
■差引額	38 億 93 万 3 千円

社会福祉施設
社会福祉施設の運営などにかかる予算をまとめたもので、措置費、委託費、介護保険、自立支援費、診療収入および都道府県・市町村からの補助金を主な財源として、社会福祉施設運営のための費用に充てられます。

■歳入	197 億 1496 万 5 千円
■歳出	157 億 8985 万 7 千円
■差引額*	39 億 2510 万 8 千円

注）収入とは「収益的収入」、支出とは「収益的支出」、差引額とは「収益的収入支出差引額」のことです（＊の差引額を除く）

広がる防災・減災の輪

3.11 2011 JAPAN
未来へつなげる 防災・減災プロジェクト

忘れないプロジェクトとは？

これまで起きた災害の経験や教訓をこれからの防災・減災へつなげるための取り組み。今年も３月１～31日の期間中、以下をはじめとした全国353社の企業・団体と共に、防災・減災の大切さを訴えました。
私たちは、忘れない。

参加団体 PICK UP #1

大阪・新世界
シンボルタワー 通天閣

展望台で「綺麗（きれい）に撮れタワー！」と幸福の神様ビリケンさんとの記念写真を撮影してくれるスタッフの胸元にも「忘れない」バッジが。接客スタッフがバッジを着用することで、「私たちは、忘れない。」の意識を盛り上げました。

参加団体 PICK UP #2

忘れないバッジと共に記念品も配布

首都圏
首都高速道路株式会社

代々木PAで地震防災イベントを実施。運転中に地震が起きたときの対処法をまとめた展示とともに、防災・減災を啓発する「忘れない」ムービーを放映。災害から身を守るためのメッセージを、ドライバー一人一人に伝えました。

参加団体 PICK UP #3

全国
ショッピングセンター パルコ

屋外大型ビジョンで「忘れない」ムービーを放映したほか、全国各店舗のスタッフがバッジを着用。新たなカルチャーを積極的に発信してきた強みを生かし、これから必要な防災意識についても若年層を中心に訴え掛けました。

参加団体 PICK UP #4

愛知・豊橋
プロバスケットボールチーム
三遠ネオフェニックス

選手はバッグに、コーチ陣はスーツに「忘れない」バッジを着用。ホームゲームが開催された11日には、復興支援や防災をテーマとしたコラボ企画も行われ、選手による義援金の募金活動やバッジの配布なども行われました。

全国353社にご参加・協賛をいただきました。
ありがとうございました。

平成30年4月1日（毎月1日発行）　第935号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）
第935号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）　平成30年4月1日（毎月1日発行）

AREA NEWS

全国各地、あなたの生活のすぐそばで、日本赤十字社の活動は行われています。

- 日本赤十字社支部（各都道府県）… 47支部
- 病院など医療事業施設 …… 103カ所
- 血液センターなど血液事業施設 … 232カ所
- 社会福祉施設 …… 28カ所
- 看護師など養成施設 …… 25カ所

（平成29年4月1日現在）

3.11 あなたの力が必要です 復興・減災プロジェクト
私たちは、忘れない。

大阪府

台風21号での活動を次へとつなぐボランティアの固い団結

3月11日、大阪府支部で企画から当日の運営まで全てボランティアの手で行われる“赤十字ボランティアのつどい”が開催。東日本大震災の犠牲者への黙とうで始まり、河内長野市の災害ボランティアセンター長による基調講演、防災ボランティアの活動報告と続きました。124人の参加者は、災害から命と健康を守る赤十字ボランティア活動への思いを新たにしました。

昨年の台風21号被害での活動に関する基調講演や活動報告が行われた

3.11 あなたの力が必要です 復興・減災プロジェクト
私たちは、忘れない。

香川県

大災害！トイレはどうしよう！？減災の啓発講演会を開催

3月9日、高松赤十字病院で“大災害！どうするトイレ”と題した講演が開催されました。東日本大震災の教訓を伝えようと毎年行う企画の一環で、今年は生活に必要不可欠なトイレがテーマ。講師から、災害時にトイレが使えなくなった際の問題などが説明され、参加者からは「トイレの重要性を改めて感じた。災害について考える、良い機会だった」との感想が寄せられました。

講演では、新聞紙とビニール袋を使った緊急トイレの作り方も紹介

東京都

残りの人生、笑って過ごそう！落語で学ぶ終活セミナーを開催

東京都支部は1月29日、「赤十字終活セミナー」を実施しました。今回は落語家の三遊亭楽生師匠による“落語で学ぶ終活のいろは”の上演や、終活バンク株式会社の石丸裕美さんによるトークセッションを開催。笑い声の絶えない終活セミナーとなりました。また、赤十字活動資金の使い道を知ってもらうため災害救護の活動報告を行い、参加者から好評を得ました。

「終活のことを楽しく聞け、内容も分かりやすかった」と参加者

熊本県　関東甲信越

10代の“ちからとおもい”がつなぐ絆 献血＆復興応援キャンペーン

関東甲信越地方では、1月1日～3月31日、10代を対象にした献血キャンペーン“Teens Support for Two!”が実施されました。これは、命を救うための献血と、熊本復興への応援メッセージを組み合わせたものです。関東甲信越1都8県の10代から集まった1300通以上の応援メッセージは熊本県に届けられ、熊本市の下通り献血ルームCOCOSAなどに掲示されています。

メッセージに喜ぶ熊本の高校生。熊本からは御礼の声が続々と届いた

3.11 あなたの力が必要です 復興・減災プロジェクト
私たちは、忘れない。

神奈川県

料理で被災地の今を思う 病院食堂で東北の郷土料理を提供

秦野赤十字病院は、3月5日から9日まで、院内レストランや病院食で、東北地方の郷土料理を提供しました。食を通して、東日本大震災の被災地の復興に思いをはせてもらうというこの企画は、昨年に続いて2回目の実施です。レストランの眞島勝美マネジャーは「被災地のおいしい郷土料理を皆さんに食べてもらい、復興を応援したい」と笑顔で語りました。

被災5県の名物、岩手あんかけかつ丼や仙台マーボー焼きそばも！

3.11 あなたの力が必要です 復興・減災プロジェクト
私たちは、忘れない。

全国

東日本大震災から7年。“私たちは、忘れない。”全国各地の防災啓発活動

3月、全国各地の赤十字施設で啓発活動が展開されました。

3月8日、大津赤十字病院（滋賀）では、災害の経験を教訓に「備え」の意識を高める防災啓発イベントを実施。院内に東日本大震災での活動の様子や救護用の資機材などを展示。啓発リーフレットと赤十字支援マーク*入りのお茶も配布しました。

3月9日、石川県では支部、病院、血液センターや献血ルームで職員などが救護服（災害時に着用する日赤のユニホーム）姿で、防災意識の向上を呼び掛ける活動を実施。

東京都支部では3月11日、奉仕団が中心となり市民団体と高校生が防災の事例を発表するイベントを国分寺市の市民ホールにて開催。日本赤十字社では、今後も防災・減災啓発の取り組みを継続します。

*売り上げの一部が日赤の活動に寄付される商品に付くマーク

滋賀県
職員の震災における活動内容の説明に、熱心に耳を傾ける方も多かった

石川県
日赤の救護服を見て「防災を意識した」という声も多く聞かれた

東京都
救護ボランティアによる救護所立ち上げの実演もされ、防災・減災への意識を高めた

大分県

緊急事態でも、私たちにおまかせ！高校生が救急法の技術と知識を競う

大分県の高校生を対象にした救急法の大会が2月11日に開催されました。命と健康を大切にする精神を養うことが目的で、一次救命処置などの実技試験や、筆記試験を実施。終了後には審査員を務めた赤十字救急安全奉仕団員から試験結果の解説が行われました。参加した高校生にとって、より実践的な救命処置についての理解を深めることができる、貴重な機会でした。

三角巾による手当ての実技試験も実施。各選手は真剣に取り組んだ

宮城県

校舎に刻まれた被災の記憶を胸に…プレハブ校舎で学んだ最後の卒業生

3月9日は、石巻赤十字看護専門学校の卒業式でした。津波で被災し、新校舎が完成するまでの間、プレハブ校舎での授業が行われていた同校。今年の卒業生は、そんなプレハブで学んだ最後の学生になります。全国で行われた赤十字専門学校卒業式と同様に、伝統の救護員制服を着用し母校を巣立った看護学生の皆さん。4月から看護師としての道を歩み出します。

熊本地震の際は自発的に募金活動を行うなど意識の高い学年でした

常任理事会開催報告

平成30年3月22日、本社において平成29年度第11回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会は、付議事項はありませんでしたが、山口赤十字病院の施設整備計画の進捗、東日本大震災復興支援国赤十字・赤新月社会議および予算の補正にかかる2月分の社長専決事項について、それぞれ報告しました。

理事会開催報告

平成30年3月23日、全国社会福祉協議会会議室（新霞が関ビル）において平成29年度3回目の理事会が開催されました。審議結果は下記のとおりです。

記

1　資金の借入について
　（武蔵野赤十字病院の施設整備にかかる資金の借入）
2　第91回代議員会に付議する事項について
　（役員の選出、平成30年度事業計画および収支予算）
　審議の結果、いずれも原案のとおり議決されました。

また、バングラデシュ南部避難民への日本赤十字社の対応、東日本大震災復興支援国赤十字・赤新月社会議および社長委任事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

また、常任理事会の理事の互選が行われ、諸星衛、松金秀暢、加藤秀郎、金丸康信、藤原忠彦、谷野光司郎、西宮映二、比嘉幹郎の各氏が選出されました。

代議員会審議結果公告

平成30年3月23日、新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」において開催した第91回代議員会の審議結果は下記のとおりです。

記

第1号議案　役員の選出について
　理事13人が次のとおり選出されました。

理事　諸星衛	理事　松金秀暢	理事　小笠原弘
理事　町田錦一郎	理事　竹内希六	理事　齋藤正
理事　神谷美智子	理事　北村又郎	理事　横河僖治
理事　谷野光司郎	理事　田儀セツ子	理事　愛甲三郎
理事　幸重綱二		

第2号議案　平成30年度事業計画について
　原案のとおり議決されました。
第3号議案　平成30年度収支予算について
　原案のとおり議決されました。

「知ってて良かった！健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター＆ナースが教える
知ってて良かった！ 健康豆知識

file. 44

「スマホ老眼」はピント調整力の衰えで発症する

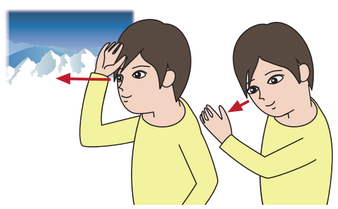
福井赤十字病院　眼科部長　小堀 朗（こぼり　あきら）
福井県福井市月見2丁目4－1　TEL　0776-36-3630

「スマホ老眼」は、ピントを調節する目の筋肉に過度の負荷がかかり発症する、一時的な眼精疲労です。

ピントを調節する力は、遠くよりも近くを見るときにより強く働く特徴があります。スマホのように小さな画面を、長時間、近距離（15～20cmほど）で見続けて目を酷使することで、ピントが合いにくくなる、目の奥が痛い、目の奥に圧迫感があるといった、老眼に似た症状が一時的に現れスマホ老眼となります。

スマホ老眼になりやすい人は、ピントの調節力が衰える40代以降の人、ピントを調整する力をたくさん使わなければならない遠視の人、メガネやコンタクトのピントが合っていない人など。最近では20代、30代で症状が出るケースもあるようです。一時的なものなので、そのまま老眼になる心配はありませんが、近視が進行したり、姿勢が悪くなることでストレートネック*になる可能性もあります。

予防には、老眼鏡をかける、ピントの合った眼鏡やコンタクトに替える、なるべく大きな画面のスマホを選び、目からスマホを離して操作するなどの方法が有効です。また、スマホ老眼の症状を自覚したら、ドライアイ用目薬や、調節弛緩（しかん）剤・調節改善剤の入った目薬を差したり、ホットタオルやアイマスクで目の周りを温め、血流を促したりすると改善が期待できます。



目を休めることができない人には、「近くを見る・遠くを見る」を交互に繰り返す「毛様体筋エクササイズ」がおすすめです。

*頭を支えている頸骨（首の骨）は本来、自然に湾曲しているが、頸椎が真っすぐになり過ぎて首や肩に負荷を掛けている状態

平成28年熊本地震災害　義援金受け付け中

平成28年4月に発生した熊本県熊本地方を震源とする最大震度7の地震は、多くの余震を伴い、熊本県、大分県などに大きな被害をもたらしました。いまだ復興の途上にある被災地を支援するため、下記の通り義援金を受け付けております。義援金は、熊本県*に設置された義援金配分委員会を通じ、全額を被災された皆様にお届けいたします。皆さまの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

■名称：平成28年熊本地震災害義援金
■受付期間：平成31年3月31日（日）まで
■協力方法

（1）郵便振替によるご協力（ゆうちょ銀行・郵便局）
口座記号番号　00130-4-265072
口座加入者名　日赤平成28年熊本地震災害義援金
※窓口でのお振り込みの場合は、振込手数料が免除されます
（ATMによる通常振り込みおよびゆうちょダイレクトをご利用の場合は、所定の振込手数料がかかります）

（2）銀行振込によるご協力
①三井住友銀行　すずらん支店　普通　2787530
②三菱東京UFJ銀行　やまびこ支店　普通　2105525
③みずほ銀行　クヌギ支店　普通　0620308
※口座名義はいずれも「日本赤十字社（ニホンセキジュウジシャ）」
※ご利用の金融機関によっては、振込手数料が別途かかる場合があります

（3）クレジットカード・コンビニエンスストア・Pay-easyによるご協力
詳細は日赤のサイトをご覧ください。
日本赤十字社　熊本地震災害義援金　検索
http://www.jrc.or.jp/contribute/help/28

*大分県での受付期間は平成28年9月30日をもって終了しました。

present プレゼント

クロス防災グッズ8点セット 5名さまにプレゼント！

非常時に持ち出すのに最低限のグッズをそろえた持ち出し袋。いざというときのための備えに最適です。

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。
①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢
⑤赤十字NEWS 4月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥4月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
A. 表紙　B. 「幸せだった」の一言のためにできること
C. 平成30年度 日本赤十字社の予算概要
D. 広がる防災・減災の輪　E. エリアニュース
F. 健康豆知識　G. プレゼント　H. ワールドニュース
I. 1枚の写真から
⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice（読者の声）への投稿もお待ちしています。

郵送／〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3　日本赤十字社
広報室　赤十字NEWS 4月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785　メール／koho@jrc.or.jp
（件名「赤十字NEWS 4月号プレゼント係」）
4月30日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます ※個人情報は賞品の発送のみに使用いたします

平成30年4月1日（毎月1日発行） 第935号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

WORLD NEWS

地震から3年。被災地のニーズを捉え支援を届ける
（ネパール）

母親たちは子どもたちを近くで遊ばせながら水道補修作業を行う

老若男女、村人たちは協力し合って「自分たちの水道」を補修する

ネパール地震の被災地で継続される“暮らしの復興”と“心の復興”

世界最高峰のエベレストを擁するネパールが、過去80年で最大の地震に見舞われて３年。日本赤十字社は地震発生直後から、長期にわたる被災地支援を継続しています。

60万の家屋が全壊 安全・安心な暮らしを取り戻すために

2015年４月25日にネパール地震が発生してから３年がたちます。死者は8857人。伝統的な家屋は石積みで揺れに弱く、全壊家屋は約60万戸にも及びました。日赤は、地震発生直後に最大の被災地となった東部のシンドパルチョーク郡へ医療班を派遣。延べおよそ２万人を支援し仮設診療所も建設しました。現在も皆さまからの救援金約20億円を基に、住宅再建、生計支援、手洗い再建や水道設備補修、地域保健などの復興事業を中心に支援を行っています。

屋根も壁もトタン板１枚の簡素な仮設住宅で寒さに耐える被災者たち

住宅再建も自分たちの手で！ 技術指導のサポートを継続

日赤や各国赤十字社が支援のためネパールで活動していますが、復興の主役はあくまでも住民たちです。例えば、生活の礎である家屋も、村全体が協力し合って住民たち自身で再建。85歳の老人ががれきを資材にしようと自ら石を砕く姿もありました。

震災後、ネパール政府は強い家を再建するために新たな建築基準を設定しています。そこで日赤は、住民たちがその基準に見合う家を建てられるよう、約1500世帯を対象に必要な資金を提供。コンクリートの土台作りや柱に鉄の骨組みを入れるための技術支援も行っています。標高1800mに位置し、冬季は夜間マイナス５度にも下がる現地では、壁も屋根もトタン板１枚だけの仮設住宅での暮らしは過酷です。自宅を再建し「寒さをしのげるようになったよ」と笑顔を見せてくれる人もいます。その笑顔が少しでも広がるよう、復興が急がれています。

電力供給が安定しない地域に、パナソニックから寄贈されたソーラーランタン996個を届けました

真の復興を手にするまで 被災者を支え、見守り続ける

住宅再建以外でも、日赤の支援プログラムは「住民主体」を核としています。住民自らの手で自発的に行われる事業こそが真の地域復興であり、心の復興につながるからです。一方で、農業を営む住民が多いため本業が忙しく事業が進まないという課題もあります。また、ヒアリングを行うことで見えてくる問題もあり、電力供給が安定しない現地にパナソニック（株）より寄贈されたソーラーランタンを送るなど企業からも援助を得て問題解決を図っています。今後も日赤は、住民たちの良き相談相手となり、ネパール赤十字社と協力して復興事業への長期的な支援を継続していきます。

1枚の写真から
picture tells stories

“自らの手で家を再建できた”喜びの笑顔が咲く［ネパール］

2015年のネパール大地震で家が全壊したラワ・タマンさん（65）。一瞬にして全財産を失い、救援物資と防水シートでしのぐ日々が続きました。手作りシェルターで２年半を過ごした後、親戚から借りたお金と、赤十字の支援金を元手に資材を購入。息子や隣人の助けを借り、自らの手で家を再建しました。日本から来た私たちに見せたいと自慢の我が家に招き入れてくれ、3DKの各部屋を案内しながら「家を失い苦しかったけれど、安全で満足できるすてきな家ができた。今は本当に幸せだ」と満面の笑みで語ります。

語り・写真撮影 ◎ 日本赤十字社 国際部 小川 桂